

## 論文審査の結果の要旨

令和2年2月20日

申請者： 姜 暁紅

論文題目： 談話における省略現象の日中対照研究  
—動詞の行為項の省略を中心に—

本提出論文は、テニエール（2007）の「結合価」及び「行為項」の概念、河上（1996）の「意味ゲシュタルト」などの理論に依拠し、日中両言語の談話における、動詞述語文の「行為項」の省略に焦点を当てて行った研究である。日中対照分析に当たっては、意味内容により分類した動詞に関する「項構造」を構築した上で、「結合価」に基づき、「行為項」省略に関わる各種類の動詞の分布、省略された「行為項」の意味役割別の分布、各種類の省略ストラテジーの分布に関して分析を行い、その異同を究明した。

省略という言語現象は、日中両言語において頻繁に見られる現象であるが、省略箇所、省略の方法は、それぞれの言語で異なる。そのため、この省略現象の異同を明らかにすることは、日中両言語の特質の一部を明らかにすることになり、さらには両言語学習、日中翻訳、異文化コミュニケーションの促進にも資することとなる。本研究は、省略の中でも意味役割レベルにおける動詞の「行為項」の省略に焦点を当て、省略の特徴を考察し、さらに量的にかつ質的に日中対照分析を行っており、省略される「行為項」の種類、使用するストラテジーが日中両言語において異なることを示した。ここに本研究の新規性が認められ高く評価された。

本研究の第二の評価すべき点は、日中両言語における動詞を、文中における意味内容により5種類に分類し、さらに伝統的に文法カテゴリーとしてみなされてきた3つのヴォイスも加え、動詞「行為項」のそれぞれに、12種類の意味役割を定め、その異同を明らかにし、省略現象の対照分析を行うための「項構造」を独自に構築した点である。

本審査会は、令和2年2月18日（土）、城西国際大学東金キャンパス本部棟4階会議室において実施した。本審査会では、本研究の内容が簡潔にまとめられ、かつ要点を明確にした発表が行われた。審査委員からの質問については適切に答え、さらに研究が必要な部分は今後の課題として研究を続けるという姿勢が明確に見え、研究者としての学術的姿勢が見られた。

しかし、本研究及び発表には上述した評価すべき点はあるが、問題点がないわけではない。先行研究の理解において一部不十分な箇所が見られたことを指摘しておきたい。

上記のような問題点が存するにしても、今回の研究で弱かった理論的基礎を整理した上で固め、今後の研究を継続していくことで成果が得られることが期待される

本提出論文は、博士の学位を授与するに十分な内容を有したものと判断して合格とした。

審査員（主査）： 人文科学研究科 板井 美佐  
審査員（副査）： 人文科学研究科 吉田 朋彦  
審査員（副査）： 人文科学研究科 林 千賀  
審査員（副査）： 大連外国語大学 陳 岩